

日独プロレタリア文学の往来

——雑誌「Die Links-Kurve」を中心に——

和田 崇

一、はじめに

——プロレタリア文学の国際性に関する一視座

日本文学史上においてプロレタリア文学が果たした意義の一つとして、国際性を持った文学運動であったということが挙げられる。日本のプロレタリア文学運動が高揚していた一九三一年当時、鹿地亘はその国際性について次のように述べている。

日本のプロレタリア文学運動は一九三一年において、始めて、国際プロレタリアートの文化的建設の運動に、その一部分として結びついた。日本の運動が国際的方針にしっかりと貫かれた運動の国際性といふことが今日ほど本質的に理解されたことはかつてなかつたといつていい。^①

なぜ一九三一年なのかという問いの答えは、プロレタリア文学研究者にとつては自明のことである。この前年、一九三〇年一月六日から十五日にかけてウクライナ共和国のハリコフで行われた第二回革命作家国際会議（通称「ハリコフ会議」）において、鹿地の言う「国際的方針」が出され、日本のプロレタリア文学運動はこれまで以上に「国際性」を意識するようになった。そして、三二年二月に日本プロレタリア作家同盟（ナ

ルプ）は国際革命作家同盟に加入し、「国際革命作家同盟（モルプ）日本支部」という長々しい署名が地方で発行された檄文やニュースにも付されるようになるのである。

プロレタリア文学の国際化を促したこのハリコフ会議による成果は、日本国内の運動に多大な影響をもたらしながらも、一方で大きな問題を胚胎していた。日本代表として出席した二人は、英語表記で「Matsuyama Bin」や「Nagata Kan」^②と、匿名であり、その正体は、日本でプロレタリア作家としての実績を持たずに渡欧した勝本清一郎と全日本無産者芸術連盟（ナツプ）初代委員長の藤森成吉であった。そして、二人が会議で報告した日本に関する情勢は、ナツプ派と対立する労農芸術家連盟（文戦）を、革命運動を妨害する社会民主主義勢力として敵視する内容だったのである。出席者の一人である勝本の滞欧の意義について詳細な研究を行った中川成美は、ハリコフ会議の問題点を次のように結論づけている。

勝本・藤森は日本のプロレタリア文学運動を国際舞台に引き上げる役割を果たした半面、その社会ファシズム論を援用して文戦派排撃を目論見、弾圧によりますます弱体化する日本のプロレタリア文学戦線統一の機運を挫いた。^④

同じく中川の研究で着目したいのは、勝本が同会議の日本問題に関する決議文を邦訳して日本へ通信する際、「文戦派排撃を目論見」るために加筆修正を行っていたという指摘^⑤である。たとえば、決議文の最後に付された日本の運動に関する提案が、勝本の翻訳によって次のように書き変えられている。中川の参照した原文の桑野隆訳（ロシア語からの翻訳）と合わせて英語版も提示し、より翻訳通信のダイナミズムを示したい。

8 革命的同伴者を味方に奪い返しつつ、文学における社会民主主義の影響に対する闘いを強化する。（桑野隆訳、栗原幸夫ほか編『資料世界プロレタリア文学運動第四巻』三二書房、一九七三年九月）

8. To help the struggle against social-democratic influence in literature by bringing all revolutionary literary «fellow-travellers» over to the side of the Union of Proletarian Writers. (Resolution on proletarian and revolutionary literature in Japan)^⑥

八、××的同伴者を自己の周囲に引き寄せることによつて、左翼社会民主々義政党の影響下にある文学団体たる『文芸戦線』一派と徹底的に闘争しなければならぬ。（日本に於けるプロレタリア文学運動についての同志松山の報告に対する決議）、『ナツプ』一九三二年二月）

右の引用からわかるとおり、『文芸戦線』一派」という記述は原文にも英語訳（さらには独語訳）にも見られない。戦後に小田切秀雄が、かの有名な「ナツプの眼鏡をはずせ」というナツプ派偏重のプロレタリア文学研究の是正を促す提案をしたが、ナツプ正統史観をかたどるフレームは、この翻訳報告によって作られたのである。

このように、日本のプロレタリア文学運動は、時には媒介者による翻案という問題もはらみながら、国際機関の指導の下にその方向性が定め

られていった。ただし、本稿の目的とするところは、勝本による書き変えの意図を追及することではなく、また、ハリコフ会議そのものの詳述でもない。前者に関しては、中川も指摘しているとおり、大会そのものが一九二八年のコミンテルン第六回大会を踏襲した社会民主主義Ⅱ社会ファシズムの路線に立っていたし、共産党支持者の中から社会民主主義の異分子を排除する動きは、ロシアに次ぐ共産党の勢力を有したドイツ（ヴァイマル共和国）でも盛んに行われていたことである。そのため、好意的な解釈をすれば、勝本は日本の情勢に即して脚色をただけだという見方もできるだろう。本稿で着目したいのは、そうしたプロレタリア文学運動で生じた問題のデイテールではなく、国を超えて行われた言論の往来そのものの総体である。

プロレタリア文学、あるいはプロレタリア文化や芸術が国際性を持った背景には、革命思想という普遍的要因はもちろんのこと、勝本が携わったような文学者や芸術家各々による翻訳活動があった。それは、対ソヴィエト・ロシアという関係においてはトップダウンのような一方向的であったけれども、革命途上国どうしにおいては必ずしもそうではない、双方向性を持つていたように感じられる。そこで、本稿では、プロレタリア文学が国際的な交流で形成された日本文学史上まれな文学様態であったという認識に立った上で、ハリコフ会議に出席した勝本や藤森の滞在したドイツと日本の関係を中心に考察する。とりわけ本稿では、日独プロレタリア文学の言論往来の総体をとらえる序論として、雑誌“Die Links-kurve”を中心に見ていきたい。

二 「Die Links-kurve」における日本のプロレタリア文学の紹介

「Die Links-kurve」は、ベルリンにおいては「デー・リンクス・クルフェ」と発音し、一九三〇年前後の日本の文献では「左翼曲線」と訳して紹介されていることが多い。同誌はドイツ共産党(KPD)の指導下に発行された月刊誌で、一九二九年八月に創刊され、一九三二年一一・一二月合併号まで発行された。Johannes R. Becher, Andor Gabor, Kurt Kläber, Erich Weinert, Ludwig Renn という五人の革命作家による集団編集体制をとり、実質的にはプロレタリア革命作家同盟(Bund proletarisch-revolutionärer Schriftsteller)の機関誌の役割を果たしていた。

『リンクス・クルフェ』そのものについては、日本語論文でも概要を論じたものがあり、本稿での詳述は省く。今回着目したいのは、同誌上に掲載された日本のプロレタリア文学に関する記事である。そこで、筆者が確認できたものを左に列記する。

- ㉠ 'Revolutionäre Zeitschriften in kapitalistischen Ländern', 1929.12., pp.22-23.
- ㉡ K. Ito., 'Revolutionäre Zeitschriften', 1930.3., p.22.
- ㉢ Kae Moryama, 'Der Mann mit der Krücke', 1930.4., pp.4-5.
- ㉣ N. Tokunaga, 'Die Fahnen', 1930.10., pp.26-28.
- ㉤ S. Fudimori, 'Die proletarisch-revolutionäre Literatur Japans', 1930.10., pp.28-30.
- ㉥ 広告: Internationaler Arbeiter-Verlag ("Die Straße ohne Sonne"を
含む), 1930.11., p.22.

㉦ 広告: Internationaler Arbeiter-Verlag ("Die Straße ohne Sonne"を
含む), 1930.12., p.41.

㉧ 広告: "Die Straße ohne Sonne", 1931.2., p.33.

㉨ Seitiro Katumoto, 'Der Krieg in der Mandschurei und die proletarischen Schriftsteller Japans', 1931.12., pp.17-21.

㉩ 広告: Mopr-Verlag の Die rote Reihe シリーズ ("Der März 1928"を
含む), 1932.2., Rückseite.

これ以外にも、モップル出版(Mopr-Verlag)が刊行した世界の回想録(Internationale Memoiren)シリーズの広告に片山潜の「*Es gärt in Japan*」(『不満のくすぶる日本』)があったが、文学関連ではないため除外した。

列記したものを順番に説明していく。㉠と㉡は世界の資本主義国家における革命的雑誌の紹介文で、ニューヨークやパリで発行された雑誌と並び、東京で発行された『戦旗』(㉠)と『国際文化』(㉡)が紹介されており、㉢には千田是也の本名である「K. Ito」の署名が確認できる。㉣は千田が翻訳した森山啓の詩「松葉杖の廃兵」(『プロレタリア芸術』一九二八年三月)で、「Dieses Gedicht des japanischen proletarischen Dichters bringen wir trotz der noch nicht ganz überwundenen pazifistischen Tendenz. (日本のプロレタリア詩人が書いたこの詩には、まだ完全に克服されていない平和主義的な傾向があるけれども掲載する。)」とコメントプロローグが付されている。㉤は徳永直の小説『太陽のない街』(戦旗社、一九二九年十二月)の翻訳で、「突風」の章の「一その前夜の」の一節が抄録されており、「Wir Bringen ein Kapitel des interessanten japanischen proletarischen Romans "Straße ohne Sonne", der im Oktober im Internationalen Arbeiterverlag erscheint. (国際労働出版局から一〇月に出版される興味深い日本のプロレタリア小説『太陽のない街』の

つの章を掲載する。」と付されている。⑤は藤森成吉による日本のプロレタリア作家の紹介文で、⑥⑦⑧はドイツ語版『太陽のない街』を出版した国際労働出版局の広告で、特に⑧は『太陽のない街』の単独広告となっている。①は勝本清一郎による日本のプロレタリア文学運動に関する報告で、そして最後に、②は小林多喜二の小説『一九二八年三月十五日』のドイツ語版を出版したモップル出版の広告で、同書の書影が大きく掲げられている。

これら『リンクス・クルフェ』から抽出した八つの日本プロレタリア文学関連記事の中で、筆者が注目したのは③と④である。まず、③の千田是也が書いた記事は、前述のとおり雑誌『国際文化』が紹介されており、それに続いて左のような文章が付されている。

Zum Schluß sei noch die Zeitschrift "Bungei Sensen" erwähnt. Sie spielte in der Vergangenheit eine bedeutende Rolle für die Entwicklung der japanischen proletarischen Literatur. Später hat sie die Entwicklung nach rechts mitgemacht und wurde das Organ der linken Sozialdemokraten und die Zukunft der literarischen Deserteure aus der politischen Front des Klassenkampfes. (最後に、雑誌『文芸戦線』について言及する。この雑誌は過去に日本のプロレタリア文学の発展に重要な役割を果たした。その後、同誌は右へと展開し、左翼社会民主主義党の機関誌、および階級闘争の政治戦線からの文学的脱落者の避難所となった。)

(千田是也「革命的雑誌」)

考察は後回しにして、次に、⑤の藤森成吉による日本のプロレタリア作家の紹介も訳出する。¹³

今日の日本のプロレタリア革命文学運動はたいへんな活気を呈している。おそらく、それは現在のプロレタリア文学運動において多大でかつ重要な位置を占めていると言えるだろう。

日本のプロレタリア文学運動はすでに一〇年以上の歴史があり、政治運動と密接に関わってきた。一方、文学の戦線においても、日本の革命文学はすでにブルジョアないしプチブルジョアの文学を大きく後退させた。革新的作家であり、階級闘争を基盤とする彼らは、プロレタリア作家同盟 (Bund proletarisch-revolutionärer Schriftsteller) を組織した。この同盟は全日本無産者芸術連盟 (ナップ) という団体に属しており、その団体はドイツの IFA に似ている。ナップは月刊誌『戦旗』 (Kampfahne) と児童雑誌『少年戦旗』 (Kinder-Senki) を発行しており、これら二つの雑誌は、三万人以上の読者を有している。今年の九月からは、プロレタリア芸術の問題に特化した別の雑誌『ナップ』が発行され始めた。

戦旗社は日本全国に支局を組織し、読書会を設け、雑誌以外にも多数の革命的な本を出版している。特に重要なのは、プロレタリア革命大衆文学の安価な叢書である。この叢書でこれまでに出版されたのは、藤森成吉の『光と闇』、小林多喜二の『蟹工船』、山田清三郎の『五月祭前夜』、徳永直 (Naoschi Tokunaga) の『太陽のない街』、立野信之の『軍隊病』、江馬修の『阿片戦争』、橋本英吉の『市街戦』、窪川稲子女史の『キャラメル工場から』、中野重治の『鉄の話』、片岡鉄兵の『綾里村快拳録』の十編で、長編小説 (Romanen)、短編小説 (Novellen)、戯曲が含まれ、多くの労働者や農民が読んでいた。

藤森は知識階級の出身で、工場や農村で労働者として働いていた。彼の代表作は以下のとおりである。『磔茂左衛門』『蜂起』(戯曲)、『土堤の集会』など。二つの戯曲は農民の抵抗と蜂起を扱っており、『土

堤の集会』は革命的労働組合による非合法の集会を描いている。

小林は農民の家庭の出身で、一昨年の三月十五日に起きた日本共産党員の大量検挙を描いた小説『一九二八年三月十五日』で知られるようになり、小説『蟹工船』で大きな成功をおさめた。彼は『蟹工船』で、北の海の日本の蟹漁における搾取と労働者の抵抗を描写している。また、小説『不在地主』や『工場細胞』では、北海道（日本北部）の階級闘争を描いている。

山田は労働者階級出身の作家として登場し、日本のプロレタリア文学運動陣営における最も古い闘士の一人である。彼は最初に、搾取された新聞配達夫の悲惨な状況を描いた。

徳永は印刷労働者であり、昨年、『戦旗』連載分の続編である最初の小説『太陽のない街』を出版した。この小説は、評議会（日本の革命的労働組合評議会）の指導した大争議を描写している。この労働組合評議会は、一九二八年に政府によって解散させられた。『太陽のない街』は、労働者・農民大衆だけでなく、知識階級にも大きな興奮をもたらした。平易な文体が特徴的だが、感動的で、わかりやすい表現で書かれている。

立野はかつて農民や兵士であり、彼の小説にはもっぱら農民や兵士の生活が描かれている。

江馬は知識階級の出身で、戯曲『阿片戦争』のほかにくつつかの小説を書いている。

橋本はかつて炭坑夫であり、作品の中で鉱山労働者の生活や闘争を描いている。彼の最も有名な小説の一つは『棺と赤旗』である。

窪川 (S. Kubokawa) は最も有名な作家の一人で、以前に出版された彼女の作品は一貫して強い創造力を示している。

中野は刺激的なプロレタリア詩人として非常に人気がある。彼の

短編小説『鉄の話』には日本の天皇制 (Nazismus) に対する鋭い批判が含まれている。

片岡はごく最近、ブルジョア文学の陣営から我々の元へやって来た。偉大な才能を示し、親しみやすく理解しやすい表現を持っており、漁師の蜂起を描いた小説『綾里村快拳録』を通して、彼はプロレタリア作家として確固たる地位を築いた。

言及した以外にも、特に林房雄など、二〇人以上の著名な作家がいる。

村山知義は、迫力ある戯曲『暴力団記』が大成功をおさめ、注目値する。

アナーキズムからマルクス主義に移った貴司山治 (Sandi Kisch) および秋田や江口、そして古参の作家たちがプロレタリアの前線にしっかりと定着してきた。彼らの作品の多くは中国語に翻訳されている。

文学や芸術理論の分野で最も有名な働き手は蔵原である。彼はソヴィエト連邦で数年間学び、プロレタリア文学の根本的な問題に関する重要な論文を発表している。

現在、藤森とともにドイツにいる勝本清一郎も重要な理論家である。

片岡、小林、立野、中野、林、村山といった多くの同志が、共産党への関与が疑われるというだけの理由で五月に逮捕され、投獄された。

日本の社会民主主義作家たちは、雑誌『文芸戦線』(Proletarische Literatur-Front) の周囲に集っている。彼らの一部は、かつて「日本プロレタリア芸術連盟」(Japanischer proletarischer Künstlerverband) に所属し、「ナップ」の同志と一緒に仕事をしていた。今日、彼らは

革命的プロレタリアートの激しい敵である。

この裏切り者たちの中で最もよく知られているのは、前田河広一郎 (Koïro, Maedako)、青野季吉、岩藤雪夫 (Yukio Iwarudi)、葉山嘉樹 (Shigeki Hayama)、金子洋文、細田民樹、平林たい子である。日本のプロレタリア作家同盟のメンバーは、プロレタリア芸術や文学運動のポリシェヴィキ化の旗印の下に、ブルジョワ作家に対するのみならず、社会民主主義の文学者たちに対して厳しい闘争を戦う。

『戦旗』と日本プロレタリア作家同盟は、「Linkskulve」や「New Masses」などの外国の兄弟の団体や雑誌と密接に関連している。

(藤森成吉「日本のプロレタリア革命文学」)

やや長文だが、問題提起の意味も含めて拙い翻訳の全文を示した。二つの引用に共通するのは、前者が「左翼社会民主主義党の機関誌、および階級闘争の政治戦線からの文学的脱落者の避難所」と書き、後者が「革命的プロレタリアートの激しい敵」や「裏切り者たち」と記しているように、文戦派を敵対勢力と見なしていることである。

ナツ派の文戦派批判については、冒頭で中川成美の研究を引用して触れたとおりである。今一度ここで注目するとすれば、それが一九三〇年三月(千田)と一〇月(藤森)の段階でドイツ左翼文学の中心的雑誌に紹介されていたことだ。つまり、ここからわかることは、千田是也や藤森成吉といった当時の在欧知識人の手によって、文戦派排除の認識が世界へ、少なくともドイツにはハリコフ会議以前から吹聴されていたということである。文戦派にとつて、これは不意打ち以外の何ものでもなかった。

この藤森の紹介記事は、海を越えて日本へ逆輸入されたようだ。「裏切り者たち」の一人に挙げられた前田河広一郎は、翌年六月に発表したエッセ

日独プロレタリア文学の往来

セイで藤森の記事を断片的に引用しながら、「お伽話」で「ローマンテイツク」な読物であり、知識階級出身でありながら工場や農村で働いたとする藤森自身の列伝が「シユール・リアリズム的説明である」と皮肉を述べた。藤森の記事の発表から前田河の反応の間にはタイムラグがあり、その間、ハリコフ会議の報告が『ナツ』に掲載されるなどしたため、敵視された陣営のフラストレーションは溜まっていたであろう。それを示すように、前田河のエッセイが発表された同じ号の『文戦』には、「労働芸術家連盟「文戦」同人一同」名義の「ハリコフ大会日本委員会への抗議」が掲載されていた。

ただし、繰り返しように本稿ではナツ派による文戦派批判の問題を追及したいのではない。むしろ、日独プロレタリア文学の言論交錯という観点からは、前田河の批判に別の興味を持つてしまう。それは、海外で紹介された記事が、若干のタイムラグはあるもののほぼ即時的に日本で読者を持つていたということである。よつて、次節では舞台を日本へと戻し、日本におけるドイツプロレタリア革命文学の受容状況を考察していききたい。

三、日本におけるドイツプロレタリア革命文学の紹介

前節の『リンクス・クルフェ』における日本のプロレタリア文学関連記事の一覧で示したとおり、同誌の「資本主義国家における革命的雑誌」の紹介コーナーでは、『戦旗』と『国際文化』という二つの日本の雑誌が紹介されていた。これら二誌はもちろん、日本のプロレタリア文学運動にとって重要な役割を果たした(ている)雑誌という認識の下で紹介されたのである。一方で、日独プロレタリア文学の相関性という観点を導入すれば、また別の意義も見えてくる。

日本プロレタリア文学とドイツプロレタリア革命文学との関係を視座に『戦旗』を眺めたとき、まずダイレクトに『リンクス・クルフェ』との交流が目につく。『戦旗』一九三〇年一月号には、「リンクス・クルフェの編集者」名義の「独逸から来た手紙」が掲載されており、『リンクス・クルフェ』二九年一月号の書影とともに次のようなメッセージが書かれている。

我々の雑誌に於いては、芸術も文学も、すべて政治闘争の武器であることは云ふ迄もない。

我々はもうずっと以前から独逸にこの方向の統一な革命的なプラットフォームを作ること企ててゐた。我々はこの仕事を孤立してではなく、同じ目的のために努力してゐる全世界の革命的芸術家及び出版所と協力して成しとげたい。我々は密接な連絡と相互の協力が、この仕事にとって甚だ有効であることを信じる。

それ故我々は雑誌「戦旗」の諸君に我々のために支持と批判と協力をおしまないことを望む。

『リンクス・クルフェ』誌上における『戦旗』の紹介が前年の一二月号、つまり右のメッセージが掲載される一カ月前であつただけに、日独の文書の往来をおのずと意識せざるを得ない。以降、日本プロレタリア作家同盟の大会などではドイツプロレタリア革命作家同盟からのメッセージがしばしば見受けられるようになり、反対に日本からもドイツへメッセージを送るようになった。そのような交流の糸口が、三〇年前後の誌面における相互の紹介記事から確認できるのである。

しかし、雑誌や同盟間どうしの交流としては、右の一九三〇年をまたいだ時期が原初だが、広く左翼文学の交流という観点ではもっと遡るこ

とができる。その契機となつたのが、ヨハンネス・R・ベツヒャー (Johannes R. Becher) の訴訟事件であつた。

ベツヒャーはドイツプロレタリア革命作家同盟の第一議長で、前節の冒頭で触れたように『リンクス・クルフェ』の編集者の一人となつた詩人である。第二次世界大戦後はドイツ民主共和国(東ドイツ)の初代文化大臣となり、東ドイツ国歌を作詞した人物として広く知られている。彼は革命闘争を訴える詩をいくつも発表していたため、一九二五年の初旬頃から自著の押収に何度もあひ、同年八月に国家反逆予備罪などの容疑で逮捕された。その後、二七年一〇月に起訴が正式に決まり、二度にわたる公判延期の末に、二八年八月二五日付で訴訟の停止が決定した。¹⁷⁾

このベツヒャー事件については、起訴が確定した頃よりドイツ国内外から抗議や支援が寄せられ、海外からは、マクシム・ゴリキーを筆頭に、ロマン・ロランやアンリ・バルビュス、ソヴィエトやプラハの作家たちや、アプトン・シンクレアなどからも抗議の声が届けられた。¹⁸⁾ まさにこの事件は、表現の自由や左翼芸術運動をめぐる国際連帯の一つの象徴的な出来事であつたと言える。

また、右の事件の経緯を論じた小寺昭次郎は、ベツヒャー事件に対するドイツのプロレタリア革命作家同盟のアピールが、まだ正式に結成される前の一九二八年三月に出されたことに言及した上で、「ベツヒャー訴訟事件は、ワイマール共和国時代の総体的安定期のその約三年間を通じて、主体的にも客観的にも熟しつつあつたプロレタリア・革命文学者の結集・組織化に、ひとつのきっかけを与えたのではないかを想像させる¹⁹⁾」と述べている。ここに本稿の意図することを重ねあわせれば、この事件は日独連帯の一つの萌芽も作つたのではないかと「想像」したい。

先述したように、ベツヒャー事件については世界各国から抗議の声が寄せられた。そして日本も、遅ればせながら裁判の停止が決定する

一九二八年八月から九月頃に抗議書を送っていたとみられる。そのきっかけを作ったのが、ベルリンに滞在していた千田是也からの通信文であった。

『戦旗』一九二八年九月号には、ベツヒャー事件に関する二つの論文が掲載された。一つは、劇作家で評論家のル・メルテンが『戦旗』のために特別に寄稿した「詩人と裁判官」(津代堯訳)であり、もう一つは、千田是也の「詩人よ、いつわれ!」である。内容には踏み込まないが、一点だけ指摘をすると、千田が同論の中で引用した「告訴状」は、小寺が前掲論文で翻訳引用している一九二八年春頃にドイツ赤色救援会ロ・テ・ヒルフェが出版した『ヨハ・R・ベツヒャーにたいする文学的国家反逆罪』(Der literarische Hochverrat gegen Joh. R. Becher)の訴状の翻刻とほぼ一致する。ここから、千田の引用元の特定は不問に付すとして、少なくとも当時海外で起きていた革命詩人の裁判が、かなり正確に、しかも即時的に日本へ伝わっていたことがわかる。そして、ル・メルテンと千田是也の報告を受けてナツプは、「NAPF 全日本無産者芸術連盟」の名義で「ヨハネス・R・ベツヒエルに関するヒンデンブルグ共和国ライプチヒ連邦裁判所への抗議書」を送り、その内容は翌月の『戦旗』一〇月号に公開された。

さて、ここまで『戦旗』における日独プロレタリア文学交流の源泉を確認したわけだが、ここからは『国際文化』へと話を移したい。筆者の主観では、『国際文化』はプロレタリア文学研究において『戦旗』ほど重要視されてこなかったような気がする。そのため、まずは同誌について補足説明をおきたい。

『日本近代文学大事典』の説明を参考にすると、『国際文化』は国際文化研究所が発行した総合雑誌で、同研究所は蔵原惟人が中心になって発足し、秋田雨雀が所長を務めた。ソヴィエトを筆頭とする国際的なプロ

レタリア文化に関する研究や紹介を掲載し、一九二八年一月の創刊から翌年一〇月まで全十二冊を発行したが、ナツプの結成にもなつて解散し、プロレタリア科学研究所に改組された。²⁰⁾

一九三〇年三月号の『リンクス・クルフェ』誌上に、なぜ、すでに廃刊していた『国際文化』の紹介記事を千田是也が発表したのかはわからない。日本とドイツの情報通信のタイムラグを考えれば、そもそも雑誌がもう発行されていないことを千田自身が認識していなかった可能性は十分に考えられる。しかし、前節で取り上げた文戦派の排除、具体的に言えば『文芸戦線』という雑誌そのものを紹介することを戦略的に排除したことを考えると、『国際文化』の紹介にも何らかの意図が働いたと考えてもよいのではないか。あくまで仮説の域を出ないが、筆者はそれを、日本のプロレタリア文学運動の理論的先鋭性や国際性をドイツの読者へアピールする狙いがあったと考えたい。

それを少しでも確証に近づけるために、『リンクス・クルフェ』における『国際文化』の紹介文を一部抜粋する。

Diese Zeitschrift, die von den marxistischen Wissenschaftlern und Schriftstellern Japans begründet wurde, ist das Organ des internationalen Marxistischen Institutes Japans. Dieses Institut dient der Erforschung der Arbeiterkulturbewegung der Welt mit besonderer Berücksichtigung der Sowjetunion. Während die "Senki" (Sturmflut) sich mehr mit den politischen Tagesproblemen beschäftigt, dient die Kokusai-Bunka der ideologischen Klärung auf allen Gebieten der Kulturpolitik. Sie ist praktisch das theoretische Forum des japanischen Proletariats, das die Probleme von Wissenschaft und Kunst vom

Standpunkt des Marxismus beleuchtet. (日本のマルクス主義科学者や作家によって創刊されたこの雑誌は、日本の国際的なマルクス主義研究所の機関誌である。この研究所は、ソヴェエト連邦を中心に、世界の労働文化運動を研究している。『戦旗』が今日的な政治問題を多く扱う一方で、『国際文化』は文化政策の全ての分野におけるイデオロギーの解明に取り組んでいる。同誌は実質的に、マルクス主義の観点から科学と芸術の問題を調査する日本のプロレタリアートの理論的なフォーラムとなっている。)

雑誌の実際の内容と照らし合わせても特に誇張は見られないが、それでも『戦旗』との差異を示し、日本のプロレタリア文学運動が理論面でも日々発展していることをある程度力強く書いていると言えるだろう。こうして、日本のプロレタリア文学の先進性はドイツで紹介され、後にハリコフで世界へ向けても宣伝されるのである。

では、先述した『戦旗』の時と同じように、ドイツとの関連に絞って『国際文化』を眺めるとどうなるか。すると、誌名に「国際」を冠しているため当然のことだが、多くのドイツに関する記事が目飛び込んでくる。ほぼ毎号掲載された無署名の「国際文化グラフ」欄や「国際ニュース」欄はもちろんのこと、署名記事だけでも次の六編が確認できる。

- ① 村山知義「最近ドイツ美術に於ける宗教的傾向の復活」(一九二八年 一月)
- ② 牟婁堯(辻恒彦)「ドイツ左翼新聞雑誌」(同右)
- ③ 川口浩「エー・エー・キツシユの報告文学論」(一九二九年三月)
- ④ 杉本良吉「ベルリンメーデーの暴動」(一九二九年七月)
- ⑤ 川口浩「ドイツの工場新聞(一)」(一九二九年九月)
- ⑥ 川口浩「ドイツの工場新聞(二)」(一九二九年一〇月)

一目見て「川口浩」の名が多いことがわかる。もちろん、全十二冊しか発行されなかった雑誌のため、三編というのは少なく感じるかもしれない。しかし、たとえば、ドイツのマルクス主義理論家の評論の翻訳や、プロレタリア文学理論概説書におけるドイツ文学の紹介、その他雑誌に発表されたドイツ文学関連記事とあわせると、ドイツの文学状況や理論を紹介した川口の功績は大きい。千田是也や藤森成吉、勝本清一郎がドイツへ日本のプロレタリア文学(文化)を紹介する役割を果たしたとするならば、日本へドイツのプロレタリア革命文学を紹介する役割は、川口が担っていたと言える。

ところで、川口浩の記事を取り上げる前に、⑥の執筆者である辻恒彦について簡単に説明をしておきたい。論述の進行を止めてまで辻を紹介するのは、彼が日本のプロレタリア文学運動におけるドイツ語文献の受容に関して、物質面で貢献をしていたからである。もちろん、⑥のほかにも、ヴェットフォーゲルの戯曲「誰が一番馬鹿だ？」の翻訳や、一九二〇年代末のプロレタリア文壇で流行するグラトコフの小説『セメント』をドイツ語から重訳するなど、彼自身も翻訳者として重要な役割を果たしたことは言うまでもない。

川口浩によると、(東大)新人会内の文学グループにマルクス主義芸術研究会ができた頃、辻は準新人会員というべき存在であったようだ。そして、川口は「辻恒彦は卒業生で、すでに、バーマゲ・メグウィンというドイツ人商社に勤めるかたわら、店を持たずに道楽半分ドイツ語の左翼的な文献、とりわけ文芸関係の書籍の輸入をやったり、翻訳、紹介などを手がけたりしていた。私は辻先輩にはだいたい世話になった。新着書の入手はもとより、卒業論文の添削までやってもらった。」と回想している。新人会といえ、林房雄や中野重治など、多数のプロレタリア文

学者を輩出したことで有名である。川口に限らず、多くの会員が、辻のおかげでドイツ語経由のマルクス主義芸術理論の知識を得ていたことは想像に難くない。輸入や発売が禁止されている図書や雑誌もある中で、私的経営の辻書店はプロレタリア文学運動の初期においてその下支えをしていた。

『国際文化』へと話を戻そう。前掲した川口執筆の三編のうち、特に注目したのは③の論文である。なぜなら、「報告文学」は一九三〇年六月に日本プロレタリア作家同盟中央委員会が決議した「芸術大衆化に関する決議」において、大衆化の実戦形式として注目を浴びることになるからである。加えて、その創始者がエゴン・エルヴィン・キッシュ (Egon Erwin Kisch) というドイツの作家であったことも見逃せない。

極めて瑣細な事柄でも、これを注意深く観察し、綿密に探究すると、偉大な発見に到達するものである。レポルターは、最も高い社会層から最も低い社会層に至るまでの、あらゆる社会層と接触しなければならぬ。彼は到る所に居て、あらゆるものを眺め、あらゆる事柄を観察しなければならぬ。そして、いかなる場合にも上述せる三つの条件——ありの儘であらうとする意志、社会的感情、及び被抑圧者、労働者階級との緊密な結合を失はないやうに力めねばならぬ。

(*傍点＝原文)

ドイツ共産党の機関紙『ローテ・ファーン』(“Rote Fahne”)より訳出された右の文は、日本で最初のルポルタージュ論の紹介であった。川口は次のように当時を振り返る。

当時、チェッコ系のドイツ語作家、プロレタリア・ジャーナリス

日独プロレタリア文学の往来

ト、エーゴン・エルヴィン・キッシュが、プロレタリア文学の一ジャンルとして、ルポルタージュというものを唱道し、自分自身でも、その見本ともいふべき、優秀な報告文学作品を次々に発表していった。私は辻恒彦に促されてこれに着目、あれこれ調べて、この新しいジャンルを日本に初めて紹介した。(中略)

報告文学といい、労働通信運動といい、これらの紹介は、その後、ナツプや『戦旗』編集部を取り上げるところとなり、わが国のプロレタリア文芸運動の一特色を成すに至った。そのことに私もいささか寄与するところがあつたらう、と自負している次第だ。

労働通信員運動についてはドイツに特化した問題ではないため本稿では触れなかったが、川口の自負が示すとおり、これらの文学形式の問題は、運動の発展とともに日本でも次第に取り入れられていった。プロレタリア文学理論といえは蔵原惟人によるソヴィエト・ロシアの印象が強いが、同時代的にドイツ発の理論が受容されていたことも忘れてはならない。

四、おわりに——鏡としての日独プロレタリア文学

ここまで、第二節ではドイツにおける日本のプロレタリア文学の紹介記事を、第三節では日本におけるドイツのプロレタリア革命文学の紹介記事をそれぞれ考察してきた。最後に、これら二つの論点を弁証法的に展開して新たな問題を提示したいところだが、紙幅の都合でいくつかの展望を示すにとどめ、本稿のまとめとしたい。

まず、日本とドイツという異なる国で生じた同一目標を持つ文学運動を比較する上では、その共時性や同一性を分析することが重要となるだ

ろう。たとえば、川口浩は一九三〇年三月時点のドイツのプロレタリア文化団体について、「ドイツプロレタリア革命作家同盟、革命的造型美術協会、労働者劇場同盟、労働者ラヂオ同盟、ユダヤ文化同盟、労働者スポーツ団、民衆劇場、左翼曲線等」と紹介した後で、「右の団体の中で、プロレタリア革命作家同盟、革命的造形美術家協会、及び労働者劇場同盟は、互ひに密接な関係にあり、恰も我が日本に於けるプロレタリア作家同盟、美術家同盟、及劇場同盟の如き関係に立つてゐる」と指摘している。もちろん、プロレタリア文化運動は国際機関の方針に則るから、その一致や差異を見極めることによって、日本のプロレタリア文化運動、あるいは双方にまたがる問題点が浮上する可能性がある。

次に、組織が類似していれば、似たような人材を輩出する可能性も否定できない。たとえば、日本と同様、ドイツでも多くの労働者出身のプロレタリア作家が誕生するわけだが、ヴィリー・ブレーデル (Willi Bredel) のような作家は、興味の対象となる。藤森成吉の紹介文から引用すれば、彼は「純粹の労働者(金屬、船舶その他)で、党の役員で、通信員から党の地方新聞(ブレーメン、ハムブルグ等の)編集者となり、その新聞に書いた論説に依つて大逆罪を以て起訴され、現在ベルゲドルフ要塞中に禁固されている彼は、要塞で書いた長篇小説『NK機械工場』に依つて一躍ドイツ・プロの小説壇の一人者となつた。(中略)これは、工場のプロレタリアートの生活闘争、労働を、労働者の立場からリアリスチックに描き出した、ドイツ最初の小説」である。『N&K機械工場』は、筆者自らが旋盤工として働いた機械工場に題材を得ており、大衆文学的な要素を含み、ストライキが成立する過程をドラマチックに描いている³⁰。ここから、同じ労働者出身でストライキを物語化した徳永直を想起するのはたやすい。その関連付けを促すかのように、ドイツ語版『太陽のな

い街』は『N&K機械工場』と同じ国際労働出版局から、これまた同じ一九三〇年に出版されている。ただし、徳永と違いブレーデルは、合法とはいえない早く共産党に入党し、終始革命思想を貫いた。このような差異が何によって生じたのか。人物の性格に還元しない組織や運動の問題として考える必要がある。

最後に、右の『太陽のない街』と『N&K機械工場』に関連する問題として、文学大衆化の論議も見落とせない。これまた川口浩の論文を参照すると、一九三〇年八月の時点で、「我が国では最近ナツプを中心にして、芸術大衆化の問題が熱心に議論されてゐるが、この現象は単に我が国だけに留らず、国際的に共通した現象である」と指摘し、「ドイツ・プロレタリア革命作家同盟の人達の間では、工場を題材にした長篇小説、及び歴史的事件(年代的に見て、もの、十年も経つてゐないもの)に取材した時事的長篇小説の必要が、声を大にして叫ばれはじめた」と述べている。『N&K機械工場』もそのような空気に呼応するかたちで生まれるのだが、日本と同じくドイツでも多くの大衆化論が主張された中で、ここで具体的に紹介しておきたいのは、前節の前半で触れたベッヒャーの主張である。

ベッヒャーは一九三二年一〇月号の『リンクス・クルフェ』に発表した「我々の方向転換」³¹と題する長い巻頭論文で、プロレタリア革命大衆文学の発展に関して、修正しなければならぬ二つの見解が存在するとして、次のように述べている。

Die eine schädliche Auffassung besteht in der Geringschätzung der Massensliteratur, was weiter nichts ist als eine überhebliche Unterschätzung der Lesermassen selbst, in dem Zweifel, mit "qualitativer" Literatur überhaupt Massenwirkungen erreichen

zu können, in dem hartnäckigen Festhalten an einem Qualitätsbegriff, der der bürgerlichen ästhetischen Rumpelkammer entnommen ist. (中略) Die andere nicht weniger schädliche Auffassung, die uns ebenfalls von den Massen isolieren würde, bestünde in der leichtfertigen Produktion von Massensliteratur. Man kann nicht einfach arbeiten nach der Methode des geringsten Widerstands: Schund und Schmutz, rot gefärbt - und wir haben was wir wollen. Massensliteratur ist kein breit aufgelegter Schwindel. Sie ist keine billige, sondern eine nach allen Seiten hin ernsthaft zu durchdenkende Angelegenheit. (有害な見解の一つは大衆文学の蔑視にあり、これは古びたブルジョア的美学の物置から持ち出された高級概念へ固執し、そもそも「高級な」文学の方が多くの効果を得られるのではないかという疑問の中で生じる、読者大衆自体を横柄に過小評価すること以外の何ものでもない。(中略)これと同様に有害で我々を大衆から遊離させるもう一つの見解は、大衆文学の軽薄な創作である。最も抵抗の少ない方法、すなわち低俗な作品や、卑猥な作品を赤く染めただけで仕上げる方法によって大衆文学を安易に執筆してはいけない。大衆文学とは大量生産されるインチキなものではない。それは安っぽいものではなく、創作するときには真剣にじつくりと考えるべきである。)

つまり、一方では芸術至上主義的態度からくる蔑視によって大衆文学そのものの価値を否定し、もう一方では、大衆化の方法を誤解することで卑俗な作品を創作する態度があったということである。ここに、「第一の失敗は、芸術を高級なそれと、大衆的なそれとに分つことによつて、何等かの特別な大衆芸術の形式が存在するかの如き幻想を惹起したこと

である。第二は、意識水準の低い大衆を目安にする大衆芸術の場合は「イデオロギーを割合にゆるやかに」水を割ることが許されるといふ逸脱を導いたことである」という日本における「芸術大衆化に関する決議」の文言を挿入すると、あたかも鏡のように双方が重なり合う。こうして、日独の言説を比較することで「プロレタリア大衆文学」と「Eine proletarische-revolutionäre Massensliteratur」の共時性が確認できるのだ。

以上、最後は課題を提示するのみとなったが、一九三〇年前後の日独双方の主要雑誌における言論の往来について、本稿で一端が示せたと思う。本節で挙げた日独のプロレタリア文学運動の同一性や共時性の問題については、別稿を設けて論じたい。

注

- ① 鹿地亘「国際的になつたプロ文学」『帝国大学新聞』一九三一年二月一四日)
- ② 「国際××作家同盟」加入に際して檄す!!」(『プロレタリア文学』一九三二年三月)
- ③ 「To all revolutionary writers of the world', 'Literature of the world Revolution', Special Number, 1931.
- ④ 中川成美「一九三〇年代在欧知識人の一状況——勝本清一郎滞欧の意味——」(『日本文学』一九八二年一月)
- ⑤ 中川成美「ハリコフ会議経緯——勝本清一郎の役割を中心に——」(『日本文学』二八集、一九八一年九月)
- ⑥ 同・注③。なお、ドイツ語版とも記述内容は一致する。
- ⑦ 小田切秀雄「頽廢の根源について」(『思想』一九五三年九月)
- ⑧ ただし、一九三〇年五月から、Andor Gabor が退き Hans Marchwitza が新たに編集へ加わっている。
- ⑨ ハリコフ会議におけるルートヴィヒ・レンの報告によると、プロレタリア

ア革命作家同盟は、モスクワで開催された第一回革命作家国際会議の決定に応じて一九二八年一月一九日に組織され、成員は結成一年目で三〇〇名まで増加し、報告時点（一九三〇年一月）では三五〇名に及んだ。共産党への所属率は四〇%、成員の約三〇%がプロレタリアートで、約六〇%がプチ・ブルジョアで構成されていた。（Conference delegates: Morning session 13-XI 1930, 同・注③）

⑩ 小川正巳「ドイツ・プロレタリア革命作家同盟機関誌「リンクス・クルフェ」(1929年8月〜1932年12月)をめぐって」(『神戸外大論叢』二五卷三号、一九七四年八月)および、吾妻雄次郎「《リンクス・クルフェ》への序曲」(『論集』駒澤大学、三二号、一九九〇年九月)。

⑪ 広告では「Sen Katayama, einer der Begründer der japanischen Arbeiterbewegung schildert in seinen Memoiren die Anfänge und die Entwicklung der japanischen Arbeiterbewegung und gibt damit gleichzeitig eine Geschichte Japans von der Meiji - Revolution bis heute. (日本の労働運動の創始者のひとりである片山潜が、日本の労働運動の始まりと発展を回想し、明治維新から現在までの日本の歴史を記す。)(“Die Links-kurve”, 1932. 7.)と紹介されている。なお、筆者が調査したところ、この回想録の所在は確認できず、実際には刊行されなかった可能性がある。

⑫ 翻訳者に関する記載はないが、千田是也とアルフ・ラダッツによる共訳と考えられる。『太陽のない街』のドイツ語版の翻訳過程については、拙稿「『太陽のない街』の翻訳と伝播——“Die Strasse ohne Sonne” (独訳)を中心に——」(『日本近代文学』八八集、二〇一三年五月)を参照願いたい。

⑬ 長文のため原文の併記は省略した。ただし、原文を表記した方がよいと判断した箇所のみドイツ語の原文を併記した。

⑭ 原文が「Kunstlerverbandes」のため、「芸術団体協議会」とせず一九二八年一月に改組される以前の「芸術連盟」と訳した。

⑮ 一九三〇年前後のベルリンには、衛生学者の国崎定洞を中心にドイツ共産党の党員ないしシンパとして活動した日本人の知識人グループがあり、彼らの活動については、川上武・加藤哲郎『人間国崎定洞』(勁草書房、一九九五年一月)および加藤哲郎『ワイマール期ベルリンの日本人——

洋行知識人の反帝ネットワーク』(岩波書店、二〇〇八年一月)に詳しく書かれている。

⑯ 前田河「新マルコ・ポロ物語」(『文戦』一九三二年六月)

⑰ 事件の経緯については、小寺昭次郎「ベッヒャーの訴訟事件について」(『ドイツ文学研究』二九号、一九八四年三月)を参照した。

⑱ 同・注⑱。

⑲ 同・注⑲。

⑳ 渡辺正彦「国際文化」(『日本近代文学大事典第五巻』講談社、一九七七年一月)

㉑ ちなみに、『リンクス・クルフェ』の記事では、千田是也の手元にあった号として、この一九二九年九月号の目次が紹介された。

㉒ ル・メルテン(林房雄と共訳)『世界社会主義文学叢書第6篇』芸術の唯物史観的解釈』(南宋書院、一九二八年一月)、メーリング『マルクス主義芸術理論叢書3』世界文学と無産階級』(叢文閣、一九二八年一月)、ハウゼンシュタイン『マルクス主義芸術理論叢書6』造型芸術社会学』(叢文閣、一九二九年一月)、メーリング『マルクス主義芸術理論叢書7』美学及び文学史論』(叢文閣、一九三二年二月)など。

㉓ 「ドイツに於けるプロレタリア文学——「革命的」ロマンチズムよりプロレタリア・レアリズムへ」(『プロレタリア芸術教程第二集』世界社、一九二九年一月)、「ドイツ・プロレタリア文学運動発達史」(『綜合プロレタリア芸術講座第四巻』一九三二年一月)など。

㉔ 『劇と評論』(一九二六年一月)に脚本が掲載され、その後、『社会文芸叢書第三編』(金星堂、一九二七年三月)や『世界プロレタリア傑作選集第八巻』(平凡社、一九三〇年三月)、『新興文学全集第一八巻独逸篇第一』(平凡社、一九三〇年)、*ただし筆者未確認に収録された。

㉕ 『世界社会主義文学叢書第5篇』(南宋書院、一九二八年一月)として刊行。

㉖ 川口浩『文学運動の中に生きて』(中央大学出版部、一九七一年一月、二五頁)による。なお、同様のことは、同じく川口の「懐旧の時代とその人びと」(『プロレタリア芸術』「前衛」別巻)戦旗復刻版刊行会、一九八〇年一月)や、林房雄『文学的回想』(新潮社、一九五五年二月、三八頁)、

千田是也（藤田富士男監修）『劇白 千田是也』（オリジン出版センター、一九九五年十二月、一五～一六頁）でも確認できる。

②7 「芸術大衆化に関する決議」（『戦旗』一九三〇年七月掲載）には、「労農通信並びにそれを基礎として発展しつつある報告文学は、直接大衆の中から生まれてきたものである。如何に彼等自身の闘争の経験を広く伝えるかといふ切実な要求は、必然的に（中略）単純さと明朗さとを具体化しつつ、ある。我々はこれらの事実を見逃してはならぬ。我々の芸術形式の基礎的要素がそこに指示されて居るのだ」と記されている。

②8 『文学運動の中に生きて』（前掲・注②6）、四七～四八頁。

②9 川口浩「ドイツに於ける革命的芸術家——『左翼曲線』を中心にして——」（『世界の動き』一九三〇年七月）

③0 藤森成吉『ヨーロッパ印象記』（大畑書店、一九三四年四月、一六〇頁）

③1 Will Bredel, “Maschinenfabrik N. & K.: Ein Roman aus dem proletarischen Alltag”, Internationaler Arbeiter-Verlag, 1930. なお、邦訳に柴田勇二訳『国際プロレタリア叢書〈N & K 機械工場〉（四六書院、一九三一年一〇月）がある。

③2 日本における『N & K 機械工場』の唯一の作品論である林功三「プロレ

タリア革命文学研究・その一——W・ブレードルの「N & K 機械工場」の評価をめぐる——」（『ドイツ文学研究』二三号、一九七七年八月）では、同作品には「高い質をもった大衆小説のおもしろさ」があると評されている。

③3 川口浩「世界前衛芸術とその人（四）ドイツに於ける文学大衆化の問題（上）」（『国民新聞』一九三〇年八月二〇日）

③4 Johannes R. Becher, “Unser Wendung”, “Die Links-Kurve”, 1931.10.

③5 同・注②7。

【付記】一、本稿におけるドイツ語の翻訳はすべて筆者によるものである。

ただし、第二節の②を除いては、あくまで引用文の解釈として示したものであり、翻訳の正確性は考慮していない。

一、本稿は、科学研究費補助金（若手研究 B・課題番号 16K16761）の助成を受けた研究成果の一部である。

（三重大学教育学部講師）